

談話における分裂文の機能について

砂川有里子（筑波大学 文芸・言語学系）

1 はじめに

<談話例>

・・・前略・・・（小角は）もっと奥深い山で修行しようと、金峰山（吉野山）に目をつけた。ここに入って改めて修行をつづけた。

(1) 荒行の果てにかれの前に現れたのは釈迦だった。「私でどうだ？」ときく釈迦に小角は首をふった。「あなたではいまの民衆は救えない」(2) つぎに現れたのは観音とミロクだった。小角はまた首をふった。「あなた方でもダメだ」。(3) 最後に凄まじい雷鳴と岩鳴りの中から現れたのが、金剛蔵王菩薩大権現だ。(φ)おそろしい怒りの形相をしている。小角は(φ)感動した。「あなたこそ求めていたホトケだ」。小角はすぐ脇の木を切って金剛蔵王を本尊としてきざんだ。これが大峰山の本尊だ。
(家庭画報91年7月号)

以上の談話例の中で下線を付した文は分裂文と呼ばれているものであるが、ここでは(1)と(2)のように「AのはBだ」という形式を持つものをWA分裂文、(3)のように「AのがBだ」という形式を持つものをGA分裂文と呼ぶことにする。

日本語にこのようなふたつのタイプの分裂文が存在することは以前から指摘されているところであるが、これらの分裂文が談話の中でどのような機能をはたしているのか、あるいはこれらふたつの分裂文にどのような機能上の差異が認められるのかといった点については、未だに十分な研究がなされているとは言いがたい。本稿では「AのはBだ」「AのがBだ」という形式のABそれぞれの項と先行文脈とのかかわり、および後続文脈におけるAB各項のトピック持続の有様を観察する中で、これらふたつの分裂文の談話における機能の一端を明らかにしたいと思う。

2 先行文脈からの引き継ぎ

WA分裂文とGA分裂文のA B各項が、先行文脈で表現されている内容を引き継いでいる場合を「CONTINUOUS (CNT)」、引き継いでいない場合を「DISCONTINUOUS (DCNT)」とし、その比率を求めた。先行文脈を引き継いでいるとしたのは、AまたはBの項の表す内容が、(1)先行文脈でほぼ同じ表現によって語られている場合、(2)先行文脈によって表現された内容を手がかりとして推測できる場合、(3)先行文脈の表すことがらと対比的な内容を表す場合である。A B項に(1)～(3)のいずれかの条件がまったく認められない場合、あるいはA B項の表す内容の一部分だけにしか(1)～(3)の条件が認められない場合はDCNTと判定した。

判定の事例として上記談話例中の分裂文に対する判定結果をあげておく。

(1) 荒行の果てに彼の前に現れたのは釈迦だった。

DCNT

DCNT

(2) つぎに現れたのは観音とミロクだった。

CNT

DCNT

(3) 最後にすさまじい雷鳴と岩鳴りの中から現れたのが、

DCNT

金剛蔵王菩薩大権現だ。

DCNT

用例は一般成人向けの雑誌、小説、随筆から採集した。用例の総数は195、内訳はWA分裂文が126例、GA分裂文が69例である。

<表1>に示したように、WA分裂文のA項は101例(80.2%)が先行文脈から引き継がれた内容を表している。これは従来「～は」が既知情報を表すといわれてきたことをだいたいにおいて支持するものであるが、残りの25例(19.8%)を調べてみると、その多くが(1)先行文脈では現れないが、その内容が一般常識に支えられて聞き手に推測可能であると予測できるもの、および(2)写真などの言語外の情報に支えられて聞き手に推測可能となっているものであった。また、このいずれにも属さないものとして次のような例が観察された。

(4) 彼は花柳界を知らなかった。上京してきたのは4年前であったが、
父親はどうになって、・・・(夜の鶴)

(5) 「今年の初夢は、すごかったよー」と歌うようにいうのは、秋田県能代市の杉原茂（70歳）だ。（Estaminet 91年12月号）

(4) はあたかも聞き手に既知であるかのように述べている例、(5) は引用句を提示することによって聞き手にその発話を既知のものとして受け止めさせる例であると思われる。雑誌記事、特にルポルタージュにはこのような引用句の用例が少なからず認められた。

<表1>

	用例数 (%)	A		B	
		CNT	DCNT	CNT	DCNT
WA 分裂文	126 (100%)	101 (80.2%)	25 (19.8%)	4 (3.2%)	122 (96.8%)
GA 分裂文	69 (100%)	4 (5.8%)	65 (94.2%)	43 (62.3%)	26 (37.7%)

このようにWA分裂文のA項に関しては、先行文脈を引き継いでいないものでも聞き手がなんらかの形でその内容を推測し自分の知識として活性化できるものであることがわかる。

A項の場合とは逆に、WA分裂文のB項はほとんどDCNTであるが、例外的にCNTとなった4例を見てみると、いずれも指示詞によって先行文脈を受けている次のような文である。

(6) 天井の高い部屋では熱気は上部にたまり下部は比較的過ごしやすくなっています。お寺や古い民家での昼寝が気持ちよいのは、そのせいなのです。（家庭画法91年7月号）

この文は「それはなぜか」という疑問詞疑問文に対する答えに相当するもので、「お寺や古い民家ででの昼寝が気持ちよいのは、なぜかという、そのせいなのです」と言い替えることもできる。つまり、ここでは「なぜか」に対応する「そのせいだ」の部分が文のフォーカスになっているわけである。フォーカス部が必ずしも未知情報をとらなければならないものではないことは Hannay (1991)などの指摘する通りであるが、このような少数の例を除けば、WA分裂文は「A (CNT) のはB (DCNT) だ」という情報構造によって「トピック+フォーカス」という談話機能を担うものであるといえる。

一方のGA分裂文は、A項で先行文脈を引き継いでいるものはわずかに4例(5.8%)しかなく、これも従来言われてきたように「～が」が未知情報を表すということをサポートするものである。しかしB項に関しては、CNTが43例(62.3%)とDCNTを大きく上回るものの、DCNTのほうも26例(37.7%)というかなり高い割合を占めている。「AがBだ」という同定文に関しては、Bは既知を表すとされる(坂原(1991))が、分裂文に関してはそれが該当しないというほかない。

つまりGA分裂文のB項は、先行文脈を引き継ぐか引き継がないかということとは直接にかかわっていないことが明かとなったのであるが、それならばこの項が談話の中で果たしている機能はいったい何なのだろうか、また、その機能はWA分裂文の談話における機能とどのように違うのだろうか。この間に対する解答を求めるために、両分裂文のA B各項が後続文脈にどのような現れ方をするのかを次に観察してみることにしたい。

3 後続文脈におけるトピックの持続

<表2>と<表3>はA B各項が後続文脈に引き継がれるかどうかの比率を求めたものである。後続文脈に引き継がれる方法としては、同じ語句の繰り返し、代名詞化、省略、類似した内容の語句への言い替えなどが認められた(本稿冒頭の<談話例>における網掛け部分を参照のこと)。

後続文脈に引き継がれる場合は「TOPIC」、引き継がれない場合は「#」の記号を用いて表した。また、多少煩雑にはなるが、参考までに前節で調査した先行文脈からの引き継ぎの結果もあわせて提示した。「/」の前が先行文脈からの引き継ぎ、後が後続文脈への引き継ぎを表している。従って、例えば「A (DCNT/TOPIC)」というのは先行文脈を引き継いでいない情報であり、かつ後続文脈に対してはトピックとして持続するということを表している。なお、後続文脈に引き継がれる場合はその項がトピックとして持続されていると考えられる

ことから、これ以後は「後続文脈に持続する」あるいは「トピックとして持続する」という表現を使うことにする。

<表2>はWA分裂文の結果である。この場合は(1) Aのみが持続するもの、(2) Bのみが持続するもの、(3) A Bどちらの項も持続するもの、(4) A Bどちらの項も持続しないものの4つのタイプが認められた。

<表2>

W A 分 裂 文		用例数・比率	
A が の 持 み 続	(1) A (DCNT/TOPIC) のは B (DCNT/#)	3	21 16.7%
	(2) A (CNT/TOPIC) のは B (DCNT/#)	18	
B が の 持 み 続	(3) A (CNT/#) のは B (DCNT/TOPIC)	52	63 50%
	(4) A (DCNT/#) のは B (DCNT/TOPIC)	11	
A も B 持 と 続	(5) A (DCNT/TOPIC) のは B (DCNT/TPOIC)	6	13 10.3%
	(6) A (CNT/TOPIC) のは B (DCNT/TOPIC)	7	
A な B い と も 持 続 し	(7) A (CNT/#) のは B (DCNT/#)	23	29 23%
	(8) A (CNT/#) のは B (CNT/#)	1	
	(9) A (DCNT/#) のは B (CNT/#)	3	
	(10) A (DCNT/#) のは B (DCNT/#)	2	
		126	100%

<表3>はGA分裂文の結果をまとめたものであるが、この場合はAのみが持続するものは認められず、(1) Bのみが持続するもの、(2) A Bどちらの項も持続するもの、(3) どちらも持続しないものの3つのタイプに分類される。

<表3>

G A 分 裂 文		用例数・比率	
B が の 持 み 続	(1) A (DCNT/#) のが B (DCNT/TOPIIC)	20	42 60.9%
	(2) A (DCNT/#) のが B (CNT/TOPIIC)	18	
	(3) A (CNT/#) のが B (DCNT/TOPIIC)	2	
	(4) A (CNT/#) のが B (CNT/TOPIIC)	2	
A も B 持 と 続	(5) A (DCNT/TOPIIC) のが B (CNT/TOPIIC)	9	13
	(6) A (DCNT/TOPIIC) のが B (DCNT/TOPIIC)	4	18.8%
#	(7) A (DCNT/#) のが B (CNT/#)	14	20.3%
		69	100%

WA分裂文の場合、A項が持続するものは、A項のみが持続する場合の21例（16.7%）とABがともに持続する場合の13例（10.3%）を合わせた34例（27%）、B項が持続するものは、B項のみが持続する場合の63例（50%）とABがともに持続する場合の13例（10.3%）を合わせた76例（60.3%）となる。どちらも持続しない文は29例（23%）を占める。

GA分裂文の場合もほぼ似たような結果となり、A項が持続するものは13例（18.8%）、B項が持続するものは、B項のみが持続する場合の42例（60.9%）とABともに持続する場合の13例（18.8%）を合わせた55例（79.7%）、どちらも持続しないものが14例（20.3%）である。以上の結果をまとめたのが次の<表4>である。

<表4>

	A項が持続	B項が持続	A Bとも持続なし
WA分裂文	34例 (27%)	76例 (60.3%)	29例 (23%)
GA分裂文	13例 (18.8%)	55例 (79.7%)	14例 (20.3%)

以上の調査だけでは両者の間にきわだった違いは認められないが、Givon(1989)の手法にしたがってトピック持続 (TOPIC PERSISTENCE (TP)) の長さを測ってみると、B項において、両者に明らかな違いのあることが明らかとなる。

<表5>

	TPの平均値		値5以上の文%	
	A	B	A	B
WA	4.9	4.7	33.3%	26.3%
GA	4.5	7.7	38.5%	54.9%

TOPIC PERSISTENCEの値はトピックとして持続する節の数で、20以上の節に渡って持続する場合は値20を与えてある。

<表5>に見られるように、B項の場合はGA分裂文 (TP値7.7) がWA分裂文 (TP値4.7) に比べてより後方までトピックとして持続し、さらに値5以上の長い持続を行う文に関しても、GA分裂文 (54.9%) がWA分裂文 (26.3%) の2倍以上とかなり大きくWA分裂文を上回っていることが分かる。すなわち、単に後続文脈に持続するかどうかという点だけを見れば、WA分裂文もGA分裂文もそれほど大きな違いはないが、後続文脈にどれほど長い間トピックとして持続していくかという点に関しては、GA分裂文のB項が他の場合に比べて明らかに長い間持続するものであることが明かとなったわけである。

4 GA分裂文の機能

以上の観察から、GA分裂文は先行文脈を引き継がない新らしい情報Aを談話内に提示し、さらに、その項と結び付くBを後方の談話における新たなトピックとして導入するという機能、つまり談話におけるトピック導入の機能を果たしているといえるのではないかと思う。TPがA項に認められる例も13例（18.8%）認められたが、この場合はB項もともに後続文脈のトピックとなっており、A項だけにTPが認められる例は皆無であった。このことも、GA分裂文がB項によって後続文脈にトピックを導入する働きをなすものであることの傍証となるだろう。（注）

これは存在文と似て、新しい情報を談話に取り入れ、新たなトピックのもとに談話を展開させるという働きを持つものであるが、存在文と異なるのは、導入する項が常に名詞相当の項であるとは限らず、時には命題相当の項も導入することがあるという点である。

- (7) ・ ・ ・そして石井さんが住宅を設計する際にまず第一に考えるのが、高温多湿な日本の夏をどう過ごすか、ということなのです。

蒸し暑い夏を過ごすには何よりも通風の良さが一番です。石井さんの設計した目神山の住宅には、どの部屋にも三方向以上の開口部が設けてあり、天井が高いのが特徴です。（家庭画報91年7月号）

さらに、GA分裂文が存在文と決定的に違う点は、談話に取り入れた新しい項であるA項が直接トピックとして導入されるのではなく、トピックB項を引き出すためのいわば「呼び水」といえるような働きをしているという点である。

- (8) 食器乾燥器をお持ちの奥様のうち、5人に2人までが「じゃまになる」と感じているとか。これはゆゆしき問題ですよ、というわけで、置き場所をぐんと節約したのが、この食器乾燥器。（同上）

(注) A Bどちらの項も後続文脈に持続しないものが14例（20.3%）認められたが、これらはB項に「特徴」「コツ」「鉄則」など、きわめて抽象度の高い名詞が用いられるものがほとんどであった。この種の文は、A項を特に強調するという機能を持つものであるように思われるが、この点についての考察は別の機会にゆずることにした。ここでの議論は残りの79.7%についてのものである。

用例(8)は、「(1)食器乾燥器が邪魔になると感じている→(2)これはゆゆしき問題だ→(3)その問題を解決するには置き場所を節約する必要がある→(4)置き場所を節約した(すなわち問題を解決した)→(5)それがこの食器乾燥器である」という一連の脈絡の中で、(3)を省略し、接続句「というわけで」を用いることによって直接(2)と(4)をつないでいるものであるが、新しい情報としてこの談話に提出された(4)は、次に続く「食器乾燥器」を引き出すために必要な情報を表している。つまり、GA分裂文のA項は、先行文脈にない新しい情報を談話につけ加えるのと同時に、その情報に関連したB項を談話に導入する機能を果たすもので、それによって後続談話のトピックと先行文脈の内容とを相互に関連付ける機能を担っているわけである。

ところで上記の例で導入されたトピック「食器乾燥器」は、先行文脈ですでに言及されている既知の情報である。しかし、<表1>で明らかなおとおり、GA分裂文のB項は必ずしも既知である必要はない。B項が先行文脈を引き継がない未知情報を表している例としては冒頭の<談話例>における「金剛蔵王菩薩大権現」を挙げることができるが、このような例が今回の調査では、すでに述べたように、37.7%という比較的高い割合を占めたわけである。

GA分裂文のA項に後続のトピックと先行文脈の内容とを関連付ける機能のあることはすでに述べた通りであるが、このA項の機能は次のように言い替えることもできよう。すなわち、B項が既知か未知かにかかわらず新たなトピックとして後続談話に維持させるための関連性を談話に与えるのがA項の機能なのである。

5 WA分裂文の機能

WA分裂文はほとんどが「A (CNT) のはB (DCNT) だ」という情報構造をなしている。このことから、先行文脈ですでにトピックとして確立されている情報や言語外情報などから聞き手が即座に活性化できる情報をトピックとして提示し、それに新しい情報を付け加えるというのが、WA分裂文の本来の機能であると思われる。従って、WA分裂文で提示されたB項は、必ずしも後続のトピックとなるとは限らない。今回の調査ではA項だけにTPが認められたものが21例(16.7%)、さらにどちらの項にもTPが認められなかったものが29例(23%)を占めているが、この結果からも、B項のトピック導入機能はWA分裂文本来の機能ではないことが明らかである。

また、WA分裂文では、B項のTP値がGA分裂文B項のTP値よりかなり低い値を示すことや、値5以上の長い持続がGA分裂文の2文の1以下とかなり少ないこ

とも、後続文脈へのトピック導入がWA分裂文の本来の機能ではないことの傍証となる。

今回、WA分裂文については十分な考察をする余裕がなかった。後続談話にトピックが持続されないGA分裂文についてもさらに詳しくその用法を調べてみる必要がある。また、「AはBだ」「AがBだ」という同定文(坂原(1990))と分裂文「AのはBだ」「AのがBだ」との違いについての考察も今後の課題としたい。

参考文献

- Givon, Talmy (1989) MIND, CODE, AND CONTEXT: ESSAYS IN PRAGMATICS
Laurence Erlbaum Associates, Publishers
(Hillsdale, New Jersey)
- Hannay, Mike (1885) Inferrability, Discourse-boundness, and Sub-
topics in Syntax and Pragmatics in Functional
Grammar (eds. by A. M. Bolkestein, et al.):
50-63 Foris Publication (Dordrecht, Holland)
- (1991) Pragmatic Function Assignment and Word Order
Variation in a Functional Grammar of English
Journal of Pragmatics 16: 131-155
- 坂原茂 (1990) 役割, が・は, ウナギ文 『認知科学の発展』第3
巻 講談社: 29-66
- Prince, Ellen F. (1978) A Comparison of WH-Clefts and IT-Clefts in
Discourse Language, Vol.54, No.4: 883-906
- (1981) Toward a Taxonomy of Given-New Information
in RADICAL PRAGMATICS (ed. by P. I. Cole):
223-255 Academic Press (London)
- 佐藤ちよ子 (1981) 「日本語の分裂文」『現代の英語学』(安井稔博士
還暦記念論文集編集委員会編): 538-546
- 熊本千明 (1989a) 「日・英語の分裂文について」『佐賀大学英文学研
究』第17号: 11-34